朝さろんの本棚〈30〉
太宰治『富嶽百景』について

30th morning：2013 年 12 月 12 日(木)@渋谷
参加者: １０名

「富嶽百景」は、
私小説の枠組みのなかに現実とは異なる「理想的」な自身を描き、現実の自分と想像的に一体化させることで現実を乗り越える契機とした作品。

【テーマ】
〈本棚拝見(リクエスト特集)（３）完〉

【本】
太宰治「富嶽百景」
［ 初　出：『文体』1939(昭和 14)年 2･3 月、
単行本:『女生徒』(砂子屋書房 1939 年)、『富嶽百景』(新潮社 1943 年) ］

【太宰治(だざい　おさむ)**】**
1909 年(明治 42 年)6 月 19 日-1948 年(昭和 23 年)6 月 13 日。本名、津島修治。小説家。青森県北津軽郡に津軽の大地主の六男として生まれる。東京帝大中退。井伏鱒二に師事。左翼活動での挫折のあと、共産主義運動から脱落した遺書のつもりで書いた第一創作集の「晩年」が最初の作品集。この時太宰は 27 歳。その後太平洋戦争に向う時期から戦争末期までの困難な間も、妥協を許さない創作活動を続けた数少ない作家の一人。戦後は無頼派とよばれ、『ヴィヨンの妻』『斜陽』などで流行作家となる。1948 年(昭和 23 年)に 39 歳の時に愛人・山崎富栄と共に玉川上水で入水自殺を行った。遺体が発見された 6 月 19 日は誕生日であり、この日を命日とし菩提寺の東京都三鷹市の禅林寺で法要「桜桃忌」が行われる。他の主な作品に『走れメロス』『津軽』『お伽草紙』『新釈諸国噺』『惜別』『人間失格』など。その作風から坂口安吾、織田作之助、石川淳らとともに新戯作派、無頼派と称された。

【ストーリー】
東京での荒んだ生活を天下茶屋に籠り更生し見合いをして結婚する太宰自身の実生活を題材に描いた小説としても太宰文学の中でも記念碑的な作品と位置づけられるものである。

太宰作品の中期区分の可否はひとまず措き、中期を代表するこの小説は、天下茶屋逗留を経て結婚する過程を作中に盛り込んだ本作は、それまでの太宰の作品に比して、作中に充満する明るさが特徴的といえる。

【推薦のことば】 推薦者：柳河さん

本にこころがあったなら、きっとわたしの本棚にある『富嶽百景』はこう語るでしょう。『択ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり…。朝には太宰がよく似合う、などと思うのは至極、傲慢。しょっている。けれど、2013 年、富士山が世界遺産にようやっと登録されました。日本最大のアイコンが、やっとです。本棚のすみで微睡んでいる場合ではなくなりました。選ばれたのではない。もはやそれは宿命。太宰さんは悪人です。キライと思ってもハマるとナラク。惚れたが悪い。いつも気になる。だからこそのみなさま。いま一度、ご一緒にオトナの平熱状態で、私の中の「私」を「富士山」を読み解いて下さい。そんな朝をみなさまと共有できたなら、とてもしあわせ。

アサダ ダザイダ フジサンダ　テレル コイバナ スコシダケ
ブラリ ブライハ テクテクト　シワス サロンダ マッテルヨ』

【メッセージ】

12 月は、ヤナガワと愉快な仲間たち＝“てくてく実行委員会”が朝さろんをジャックします！ リクエスト特集として太宰治「富嶽百景」のテキストをていねいにお読みのうえ、おいで下さい。小さな声をつなげていくような視点で、物語の役割を旅します。スタンダードとしてのファッションをふまえ、本を読む「私」／「私たち」で一冊の本を読み解いていきましょう。恋愛模様の変遷も少し加えながら、30 回分の朝を濃縮して、祝祭的な場を共有して。　　てくてく実行委員会　　ヤナガワより

【ミッション】次の問いについて考えてみましょう。

短い時間を有効に使うため、当日までに以下のミッションを遂行してください (`_´)ゞ

1：テキストを手にいれよう！

教えずともあなたは探せる。自由な版元、形態で読んで下さい。購入しても図書館から借りても、青空文庫でも可。当日、みんなで見せ合います。

2：物語に入ってみよう！

作中の「私」はどういうひとなのか。純粋に物語に入りこんで「あなたが」観察して来て下さい。好きなシーンも探してください。

3：「富士山」をよく見ておこう！

なにかよいことが起ります。宿題として、あなたなら富士にはなにがよく似合うか、作中の「月見草」にあたる何かを考えてきてください。当日、全員に聞きます。

【解題】「富嶽百景」について

●「富士に就いて」太宰治

甲州の御坂峠の頂上に、天下茶屋という、ささやかな茶店がある。私は、九月の十三日から、この茶店の二階を借りて少しずつ、まずしい仕事をすすめている。この茶店の人たちは、親切である。私は、当分、ここにいて仕事にはげむつもりである。

（略）　私は、この風景を、拒否している。（略）この風景の切りかたには、何か仕様のない恥かしさがありはしないか。これでは、まるで、風呂屋のペンキ画である。芝居の書きわりである。あまりにも註文とおりである。（略）巧すぎた落ちがある。完成され切ったいやらしさ。そう感ずるのも、これも、私の若さのせいであろうか。

（略）所謂「天下第一」の風景にはつねに驚きが伴わなければならぬ。（略）人間に無関心な自然の精神、自然の宗教、そのようなものが、美しい風景にもやはり絶対に必要である、と思っているだけである。

初出：「国民新聞」1938（昭和 13）年 10 月 6 日発行

●「富嶽百景」執筆背景

太宰治は 1933 年（昭和 8 年）に作家デビューするが、1935 年（昭和 10 年）には東京帝国大学落第・都新聞入社試験の失敗から鎌倉で自殺未遂を起こし、パビナール中毒にも陥り、東京の武蔵野病院に入院していた。1937 年には愛人の小山初代と再び自殺未遂を起こしている。

1938 年（昭和 13 年）9 月 13 日に太宰は、井伏鱒二の勧めで山梨県南都留郡河口村（富士河口湖町河口）の御坂峠にある土産物屋兼旅館である天下茶屋を訪れる。太宰は井伏の付き添いで、同 18 日に甲府市水門町（朝日一丁目）の石原初太郎の娘・美知子と見合いを行ない、11 月 6 日に美智子と婚約し、甲府市竪町（朝日五丁目）の下宿屋である寿館に移る。翌 1939 年（昭和 14 年）1 月 8 日に正式に結婚し、甲府御崎町（朝日五丁目）の借家で新生活をはじめる。この間に発表されたのが「富嶽百景」をはじめ「黄金風景」「女生徒」「新緑の言葉」などの作品群で、2 冊の単行本も刊行している。

太宰が未完の長編である「火の鳥」を作成すべく、井伏鱒二の逗留する天下茶屋に 3 ヶ月間いる間に起こったことを小説にしている。太宰は 1939 年 9 月に甲府から三鷹へ移り、結局「火の鳥」を作ることはできなかったが、甲府時代に短編は 100 ほど作ることができた。

●「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき（芭蕉：箱根越えの道中に詠んだ句)」

…日本人の心の中に富士山が常にあることを端的に示していると解釈できる

「おぼろ富士みまもる君がうるはしの瞳にうつる海の濃緑」（川田順）

（御坂峠　天下茶屋からの富士山）

●「富嶽の詩神を思ふ」北村透谷

遠く望めば美人の如し。近く眺れば威厳ある男子なり。アルプス山の大欧文学に於ける、わが富嶽の大和民族の文学に於ける、淵源するところ、関聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我文学史の証しするところの姿にあらずや。アルプスの崇厳、或は之を欠かん、然れども富嶽の優美、何ぞ大に譲るところあらん。われはこの観念を以て我文学を愛す。

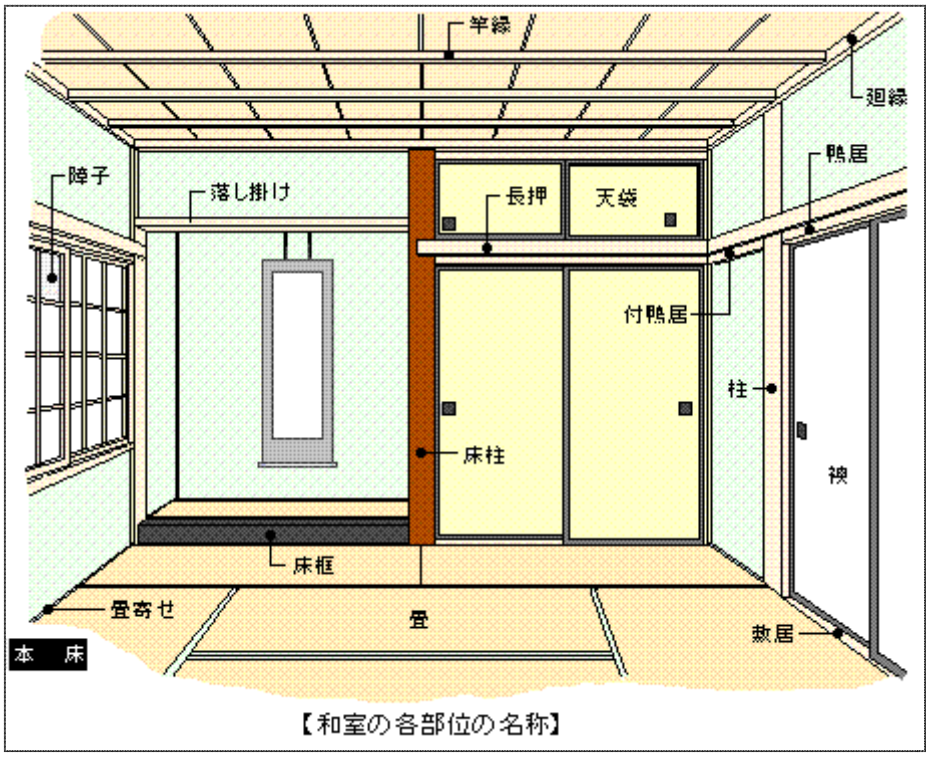
富嶽を以て女性の山とせば、我文学も恐らく女性文学なるべし。雪の衣を被ぎ、白雲の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容をたのしむ。尽きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽駿河の国に崛起せしといふ朝、彼は幾億万里の天崖よりその山巓に急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて、遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人麿赤人より降つて、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙するが為に、富嶽の周辺を往返して、形なく像なき紀念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この国なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。

（明治二十六年一月）底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」

●富士山…「不二」ともいわれる美しいフォルム。過去から現在まで、多くの文人墨客が讃えてきた霊峰。

●天下茶屋の２階にある「太宰治記念館」

●富士の大噴火火口の鳥瞰写真の掛っていた「長押」



【和室の各部位の名称】

●富士山に対する印象はどんどん変化している。その時その時の主人公の富士に対する気持ちが読み取れる箇所や描写、富士山に対するコメントを丁寧に読んでいく。

1　三坂峠の茶屋ではじめて富士と向かい合った時
2　老婆が写真を出してきて説明してくれた時
3　お見合いの家で大噴火火口の鳥瞰図をみた時
4　御坂の二階で仕事を始める
5　山頂に雪がふった
6　老婆が富士には目もくれず、月見草を指さした時
7　月の夜、水の精のように立っている時
8　富士と妥協しかけた時
9　娘二人を入れず、富士山だけの写真を撮った時
１０　甲府から見た富士の印象

●主人公以外の登場人物について、どんな性格の人か。それが判る記述に注目し、どんな性格の人か考える。

・井伏鱒二氏、
・三ツ峠の茶屋の老婆
・御坂峠の茶屋の娘、
・見合いの相手の娘さん

☞これらの登場人物たちに共通する点はなにか。

●＜言及する必要性を感じていることは次の項目である。部分的に虚構は指摘されていたが、(※「富嶽百景」が）概ね、実話小説・私小説として読まれてきたことは強く是正する必要がある。事実との齟齬について作品全体を通しての検討と、それを行なった太宰の創作方法への言及がないこと（改変が意識的に行なわれ、作品構築に改変が役割を果たしていること)。同時代の私小説への認識を踏まえた上で、『富嶽百景』の位相を評すべきであること。改変しての事実利用は小説創作上、当然で、この作品は興味深い創作過程事例であること――などである。『富嶽百景』が事実というパーツを巧みに小説の枠にはめ込んで世界を創っているか――つまり作品を構築しているか創作過程を明らかにしたいのである。

≪郵便局員新田訪問時の脚色、について≫

吉田の郵便局に勤める新田という二十五歳の温厚な青年が、主人公を訪ねてくる。ここで初めて主人公が「太宰」という小説家だと明示される。

> やうやく馴れて來たころ、新田は笑ひながら、実は、もう二、三人、僕の仲間がありまして、皆で一緒にお邪魔にあがるつもりだつたのですが、いざとなると、どうも皆、しりごみしまして、太宰さんは、ひどいデカダンで、それに、性格破産者だ、と佐藤春夫先生の小説に書いてございましたし、まさか、こんなまじめな、ちやんとしたお方だとは、思ひませんでしたから、僕も、無理に皆を連れて來るわけには、いきませんでした。こんどは、皆を連れて来ます。かまひませんでせうか。

新田の発言に「それでは、君は、必死の勇をふるつて、君の仲間を代表して僕を偵察に來たわけですね」といい、

> 「決死隊でした。」新田は、率直だつた。「ゆうべも、佐藤先生のあの小説を、もういちど繰りかへして読んで、いろいろ覺悟をきめて來ました。」
> 私は、部屋の硝子戸越しに、富士を見てゐた。富士は、のつそり默つて立つてゐた。偉いなあ、と思つた。
> 「いいねえ。富士は、やつぱり、いいとこあるねえ。よくやつてるなあ。」富士には、かなはないと思つた。念々と動く自分の愛憎が恥づかしく、富士は、やつぱり偉い、と思つた。よくやつてる、と思つた。

ここには愛憎で心乱れる主人公と動じない富士を対置させ、富士を評価する。矮小な自分を印象付けようともしている。主人公が小説家太宰とわかることによって「昭和十三年の初秋、思ひをあらたにする覺悟で、私は、かばんひとつさげて旅に出た」に太宰初期作品群や種々の事件が重なり、重大な決意の旅であると読者に作者情報が流入され、かつ実在する佐藤春夫を出し実在する佐藤の小説「芥川賞―憤怒こそ愛の極点（太宰治） 」「改造」

一八巻一一号（昭一一・一一）まで登場させ、主人公が作家太宰治（＝自堕落な人間）であることを読者に掲示するわけである。ここに端的に示されているように実生活を描いたように見せて虚構化する「私小説的装置」を駆使する部分でもある。佐藤の小説には直接「ひどいデカダンで」や「性格破産者」とは書かれていないし（「不愉快な文学青年」「我儘」「虚栄心」「妄想」等は出てくる）、『全集』年譜によれば、新田精治が天下茶屋を訪ねる最初の記事は一三年一〇月二日で田辺隆重ら男三人女一人による訪問である。小説では、一人で乗り込む決死隊新田の後、「新田は、それから、いろいろな青年を連れて来た。皆、静かなひとである」と記す。新田が決死隊の覚悟で一人、天下茶屋に乗り込んできたことは確認できない。ここはなかなか巧みで、示された「負の要素」は、まさに太宰自身の認識であり、作品内で新田によって否定され、世評と異なり「まじめな、ちゃんとしたお方」だと定義され直す。「主人公の名誉復権」の構成になっており、それが実話と読まされる。うがってみれば、「聰明に」という新田への副詞もわざとらしく、聡明な人々には主人公の本当の姿が見抜ける、を示すよう機能している。＞
（「『富嶽百景』の創作方法：私小説的装置を駆使した作品世界の構築」森晴彦、大正大學研究紀要第九十七輯、2012）

●＜太宰は「続富巌百景」（※「富嶽百景」の後半部）の口述筆記を夫人相手に行ったが、この時の二人の心のうちを長部日出雄は以下のように推測する。

> 世間からすればスキャンダル塗れの無頼漢で、心中と自殺未遂を繰り返し、麻薬中毒で精神病院にまで入れられた性格破綻者と見られている夫の核心には、このような純粋な苦悩が秘められていたのかと、改めて目と心をともに洗われる気がしたに違いない。
>
> そして作者は、目の前で真剣に筆記している妻――すなわちこの作品の最初でかつ最高の読者に、まさにそのように理解してもらおうとして、口述を進めているのに相違ないのである。（『桜桃とキリスト』長部日出雄、文藝春秋、2002））

この指摘を踏まえるならば、口述筆記で「この家での最初の仕事」としてなされた「黄金風景」は、新しい生活の出発にふさわしい作品と言えるだろう。「かれらの勝利は、また私のあすの出発にも、光を与へる」との結びの「私」の述懐は、「あすの出発」すなわち再生への願い、決意として「まさにそのように理解してもらおうとして、口述」したと言うことが可能であると思われるからである。＞
（「「黄金風景」論」田中良彦、武蔵大学人文学会雑誌 36 巻 3 号、2005）

●『富嶽百景』序　　太宰治

明治四十二年の初夏に、本州の北端で生れた氣の弱い男の子が、それでも、人の手本にならなければならぬと氣取つて、さうして躓いて、躓いて、けれども、**生きて在る限りは、一すぢの誇を持つてゐようと馬鹿な苦勞をしてゐる**その事を、いちいち書きしたためて殘して置かうといふのが、私の仕事の全部のテエマであります。戰地から歸つて來た人と先夜もおそくまで語り合ひましたが、**人間は、どこにゐても、また何をするにしても、ただひとつ、「正しさ」といふ事ひとつだけを心掛けて居ればいい**のだと二人が、ほとんど同時におんなじ事を言つて、いい氣持がいたしました。私の文學が、でたらめとか、誇張とか、ばかな解釋をなさらず、**私が窮極の正確を念じていつも苦しく生きてゐる**といふ事をご存じの讀者は幾人あつたらうか。けれども作者が、自分の文學に就いて一言半句でも押しつけがましい事をいふべきではない。ただ讀者の素直な心情を待つばかりであります。

昭和十七年冬

初出：「富嶽百景」昭和名作選集 28、新潮社（1943(昭和 18)年 1 月 10 日発行）

【まとめ】

今シーズンは 1 年振りのリクエストシーズンでした。前回シーズンと特に違ったのは、推薦者が担当回の構成や進行までをふくめて、自身の読書体験や考え方（≒本棚）を伝えようと一生懸命になってくれた点だとおもいます。朝さろんでの発見や対話の積み重ねが、各人各様に表現されていたことをすごく興味深く拝見していました。選ぶ作品も違えば、時代も着眼点も、読み解くアプローチもみんな違って、「読書」がいかに幅広い体験をカバーしているのかも再確認できました。

推薦者のみなさま、本当にありがとうございました。また次回のリクエストシーズンでお会いしましょう！

⇒　〈本棚拝見(リクエスト特集)〉シーズン（完）

さて、次回は新年 1 月からとなります。朝さろんも少し趣向を変えつつ、太宰にならって大きな山に登ってみたいと思います。

次シーズン　☞　〈自分なりの“正しさ”を考える〉